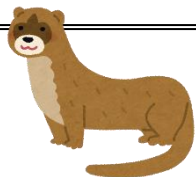


令和 7 年度  
第 2 学年

# 実 直

中野区立第二中学校  
令和 7 年 12 月 12 日  
学年通信 31 号



## かまいたち



先日のことです。印刷室で紙を整えていました。不揃いな紙を机に乗せて四隅を合わせていたところ左手小指に痛みを感じました。よく見ると、小指関節に小さく傷がついていました。こんなにも小さな傷でも、紙で付ける傷には特有の脳天を突き抜けるような痛みがあります。そんな痛さに顔をしかめながら思い出したのは小学生の記憶…。

「みんなは“鎌鼬”って知ってる？日本に伝わる妖怪でね、3匹のイタチがいたずらをするのよ。1匹は驚かして人間を転ばせ、1匹は転んだ人間に鎌で傷を付けるの。最後の1匹がその傷に薬を塗って傷を治すのよ。3匹揃って鎌鼬。この子たち、いい妖怪でしょ。」と言いながら、図工の先生が黒板に妖怪かまいたちの絵を描く。傷を付けるような怪物が“いい妖怪”かどうかは置いて、先生が描く見事な画力に声を失う。

私の小学校では、4年生になると図工の時間に通称「妖怪学」が扱われるのが有名であった。1・2年生のときには、授業の中で「妖怪」を勉強できることに憧れ、3年生になると先輩方の授業の話を目にするようになる。いざ4年生になると扱われるであろう「妖怪」の不気味さゆえ、始まる前から若干憂鬱になる。そんな様子を図工の先生は穏やかに微笑む。

そして授業。「さて、これから校庭で妖怪を探します。エピソードも含めて考えながら見つけてきましょう。そのあとデザイン図を描きますよ。」との先生の説明に対して、理科が得意な友人が質問をする。「妖怪って本当にいるんですか？」たぶん、同じことをクラスのひとつが考えていた。先生はいつもの笑みで「ふふふ。そうよね。そう思うよね。でもね、日本には妖怪の歴史が間違いなくあるの。真剣に妖怪の存在を考えていた時代があるのよ。私はね、妖怪の存在を信じるか？っていわれたら“うーん”だけど、妖怪の存在

を考える気持ちは信じるわ。さあこれは学びよ。皆さんの柔軟な発想で妖怪を探してごらんない！」信じる信じないの話は、小学生4年生にとっては難しい。でも流石は小学生、校庭に出れるとなると足取りは軽い。外は寒い12月の空気。

ある友人は上向きの蛇口を見つめ、ある友人は排水用の管の音を聞いていた。そして僕は…。どうしよう…と悩む。発想が沸かない。何となく、校庭の中央付近に歩みを進める。そこには、少年野球で守っているショートポジションがあった。校庭の土はショートの定位置部分だけ凸凹している。何とかギリギリで発想を膨らませる。

図工室に戻り、見つけた妖怪の紹介が始まる。先ほど上向きの蛇口を見つめていた友人は「じゃぐちめ」という妖怪を紹介した。上向きの蛇口の中には無数の瞳があり、その瞳はこちらの様子をうかがっているというもの。蛇口の先端に入っている金属部品が目に見えたことから膨らませたらしい。ちなみに、蛇口を上に向けておくと瞳が増幅し蛇口を利用する人間と目が合うとか。蛇口から出る水はその瞳からでる涙であるとか。何はともあれ発想がすごい。今後、蛇口覗けなくなる。

僕はおそろおそろ妖怪「しょうと」を発表した。「じゃぐちめ」の後は誰だっけ。排水管用に耳を付けていた友人の雨が降ると排水管内に動物を引き込む「くだ引き」だって霞む。僕の「しょうと」は砂の1粒1粒の裏に住む妖怪で野球ボールをイレギュラーさせる妖怪という設定にした。いつも守備練習での悩みの種はこの妖怪にあると説明を加えた。友人からの「テラ、それは妖怪のせいじゃないよ。実力と運!」と言葉も手厳しい。

その日の夕方、日が傾き始めるまで校庭で遊んだ。友人の誰かの「そろそろ帰るか」の一声で帰り支度を始める。喉が渇く。水道で手を洗い、一口水を含む。うまい。となりの蛇口が目に入る。上を向いている。やめてよこちらを見つめるのは…と思う。恐る恐る蛇口を下向きに直す。中は覗かない。ちょっとドキドキしていた。みんなとは別の方向だった。校庭をでると足早に帰路を辿る。学区の端にある自宅が遠い。あたりはすっかり暗くなっている。風が出てきて頬をなでる。冷たい。落ち葉が舞い、地面に落ちるときにまとわりつく感覚がする。あんなに楽しく遊んでいたのに、上向きの蛇口をみたせいで、妖怪のことを思い出してしまっている。そういえば、図工の先生が、鎌鼬は風に乗ってくると言っていたことを思い出す。早く帰りたい、家に着きたい。駅から遠い住宅街は街灯が少ない。遊ばずに帰ればよかったと悔いる。足が絡まる。風早く歩きたいと望む。そんな思いは他所に風が背後から僕を追い越す。

マンションの下につき、階段を駆け上がる。ここまでたどり着いたことを安心して、何気なく手の甲をみた。切れている。所々が赤くなっている。血が出るほどではないが、チクチク痛い。まさか、風の中に鎌鼬がいたのか。そんなふうにいると、怖さが膨らむ。家のドアに手を掛ける手が痛々しい。なんでこんなことに…と思いつつ家に入る。シチューの薫りにホッとす。

お湯で手を洗うと痛さが増した。その時はもう100%鎌鼬にやられたと思っている。それをお母さんに言った。「それさ、手を洗ってからよく拭かなかったでしょ？ハンカチもって行かなかったの？いつもTシャツの裾で適当に拭いているからそうなるのよ。犯人は鎌鼬ではなく、あなたです。早くお風呂に入ってハンドクリームを塗りなさい。」との回答である。この場合は続きが来るぞと覚悟をすると案の定「それね、空気が乾燥しているときに濡れたままにしておくと水分と一緒に手の油も蒸発しちゃうのよ。だからちゃんと手を拭きなさい。」と講釈が加わる。浴室に向かいシャワーを出しながら「なんだよ、蒸発とか水分とか、理科かよ。」と呟く。

月日は流れ、2020年の春、教員免許の更新講習を迎えていた。コロナ禍で講習自体を自粛する流れではあったが、商売道具である教員免許を更新しないわけにはいかず、何とか探して抽選までして群馬大学の更新講習に滑り込むことができた。片道車で2時間半。ちょっとしたドライブだと思えば、公共交通機関を使うよりも感染症のリスクは下がるし、なかなか良い講習機会である。

希望を申請するために講義一覧を眺める。どうしようかな。「自然科学発展」や「力学基礎」あたりが無難かな…と思いつつ、美術の欄に目を向ける。一瞬、時がとまる。1つの言葉に目をそらせなくなる。そこには「妖怪学入門」の講座名が書かれていた。瞬間、さまざまなことを思い出す。校庭で妖怪を探したことや探した妖怪のプレゼンを行ったこと。そして「じゃくちめ」の存在と朗らかに微笑む図工の先生。

「妖怪学」は小学校の図工の先生がオリジナルで言っていることだと思ったら、国立大学の先生が専門的な研究を行っていることがわかった。この時、恥ずかしながらも30歳間近にして「妖怪学(公式)」を始めて知った、いや考え改めたことになる。そしてもちろん「妖怪学入門」を第一希望にして申請をだす。

当日を迎えてみると受講生のほとんどは美術の先生だった。それでもちらほらと国語や

理科の先生の姿も見られた。1日8時間の講習はあっという間に過ぎていった。妖怪と幽霊の違いから始まり、妖怪探索の仕方や妖怪のデッサンまで内容は多岐にわたっていた。そのなかでも印象に残っている内容がある。それは、日本では古来から説明がつかない自然現象を妖怪の仕業にしてきた歴史があるということである。大地震が起きれば地面に住む大ナマズの妖怪の寝返りを想像し、雷が落ちれば、雷獣という妖怪が太鼓を叩いたことにしていた歴史があった。今だからこそ、そのことは科学的に解明され、地震はプレートの沈み込み現象により引き起こされ、雷の正体はフランクリン(のちのアメリカ大統領)が雷雨の中で凧揚げをするという危険な実験によって電子の存在がわかっているのである。それでも、この講義を通じて、私は妖怪を信じる気持ちは理解できるし、信じる気持ちを信じてしまうことになった。

もしかすると、雷がなる前にドドンッって太鼓が鳴るかもしれないもんね。すべて妖怪の仕業なんだって考えると気持ちは楽になるよ。

今回、世にも珍しい妖怪学について書かせていただきました。妖怪は実在しないことがわかっています。しかし、そのことを踏まえた上で、真面目に真剣に妖怪という日本特有の文化について考察し、調査をしている人がたくさんいます。それは、すでに学問として成り立っています。実在しないものを学問にすることは大変難しいと思います。それでも、そこにロマンがありました。何より、図工の先生も、大学の先生も妖怪を語っているときの様子はかっこよく輝いていたことが印象に残っています。

人間は、好きなことを話すときが、最も輝く瞬間の一つだと思います。皆さんが突き詰めたいことはなんですか？2年生は、自らの好きなことに対しての意欲や知的好奇心を満たす欲求が非常に高い集団だと思っています。それは、定期考査の点数や成績には表れにくいかもしれませんが素晴らしいことだと思います。これからも大切にしてください。最後に、蛇口は使用後に下向きにしましょうね。

【保護者の皆さま】



先日は保護者会へのご参加ありがとうございました。スキー教室実施に向けて、疑問等生じた場合には、ご遠慮なく連絡をいただければと思います。約1か月後の実施に向けて、準備を進めていきたいと思っています。